

# 洪水と水害をとらえなおす ～自然観の転換と川との共生～

著者：大熊孝 発行：農文協プロダクション

A5判変型・並製・300頁 予価 3000円（予約特典・税および送金手数料サービス。送料は実費）

河川工学の泰斗が、日本人の伝統的な自然観に迫りつつ、今日頻発する水害の実態と今後の治水のあり方について論じ、ローカルな自然に根ざした自然観の再生と川との共生を展望する。大熊河川工学集大成の書。

——大熊孝。1942年台湾に生まれる。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。工学博士。新潟大学名誉教授。主な著書に『利根川治水の変遷と水害』（東京大学出版会）、『洪水と治水の河川史』（平凡社）、『川がつくった川、人がつくった川』（ポプラ社）、『技術にも自治がある』（農文協）などがある。

## 〈目次〉

### I 私は川と自然をどう見てきたのか

第1章 日本人の伝統的自然観・災害観

第2章 近代化の中で失われた伝統的自然観

第3章 小出博の災害観と技術の三段階

### II 水害の現在と治水のあり方

第4章 近年の水害と現代治水の到達点

第5章 究極の治水体系は400年前にある

——堤防の越流のさせ方で被害は変わる

第6章 今後の治水のあり方

——越流しても破堤し難い堤防に

### III 新潟から考える川と自然の未来

第7章 民衆の自然観の復活に向けて

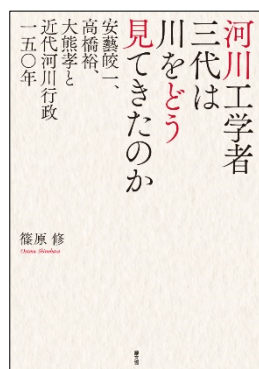
——自然への感性と知性をみがこう！

第8章 自然と共生する都市の復活について

——新潟市の「ラムサール条約湿地都市認証」への期待

付：予備知識・川の専門用語

……流域と流域面積／沖積平野を流れる川の三分類／自然堤防と後背湿地／瀬と淵／「水害」と「洪水」の違いと、川で使う流量単位／川の右岸、左岸／堤内・堤外と内水・外水／「霞堤」は誤解されやすい！／牛粋と蛇籠／T.P.とは？（川の水位の表現法）／雨量と流量の測り方／基本高水と計画高水流量／河道断面用語と計画高水位、余裕高／ダムとは？／堰と水門の違い／維持流量と正常流量／ダムの洪水調節における予備放流・事前放流と緊急放流（ただし書き操作）／穴あきダム／番外・水害調査心得



#### ■土木学会出版文化賞受賞・篠原修著『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』増刷予約を承ります！

本書発行とともに、長らく品切れ状態となっていた、篠原修著『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』——安藝咬一、高橋裕、大熊孝と近代河川行政一五〇年』を増刷いたします。

『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』は、平成30年度土木学会出版文化賞を受賞しました。「3人の河川工学者の評伝という形を取りながら、近代河川行政が様々な議論を経て今日に至っている歴史を、詳細かつ分かりやすくまとめた近代河川行政史であり、河川工学をはじめ国土について学ぶ者にとって有用な書籍として土木工学の発展に寄与するもの」（学会ホームページより）と高く評価されました。増刷予約注文いただける方は、本体価格3500円＋送料実費でお届けします（税および送金手数料サービス）。あわせて申し込みください。

## ■まえがきより（抜粋）

……私は、「河川工学」、「河川史」を専門として、水害をできるかぎり軽減させること、そして水辺での「人と自然の共生」を目的に長く教育・研究生活を送り、学生を育て、市民とともに実践活動を行ない、それなりに書物も著わし、水害対策や川と人との関係性についてさまざまな提言を行なってきた。しかし、それが実際にはほとんど役に立っていないことを、近年思い知らされている。何故こうなってしまったのか？

……その原因には、人々の暮らしや生業が地域の自然と深くかかわるなかで育まれてきた「民衆の自然観」というべきものが、近代化とともに国家運営のための自然観へと変貌し、「民衆の自然観」が消失してきたことがあるように思われる。その「国家の自然観」を支えたものが、明治時代以降に輸入された近代的科学技術であった。

……西洋近代科学技術文明はヨーロッパの長い歴史の上に築かれ、自然と共生する側面も有する奥行き深いものであると考えるが、日本の場合、その表層だけが「近代科学技術文明」として輸入され、明治時代以降の殖産興業、富国強兵、経済成長に中央集権的に活用され、自然を支配し、その恵みを収奪してきたのである。

……現在のように通信・交通手段が発達し、あらゆるものがグローバル化した時代において世界の国々と伍して競争をしていくためには、中央集権的な「国家の自然観」が必要であることは理解できる。だが、その「国家の自然観」を押し通すことになると、民衆にさらなる犠牲を強いることになるだろう。少しでも「民衆の自然観」に配慮することで、その犠牲を緩和することはできるはずである。

……本書ではまず、もともと日本人が自然に対してもっていた自然観、すなわち「民衆の自然観」がどのようなものであり、それが明治時代の近代化以降、「国家の自然観」のもとでどう変質していったのかを眺めてみたい。また、近年の水害、特に21世紀に入ってからの水害で問題なのは、床上浸水で寝たきり老人が逃げられずにそのまま溺死することである。無防備に開発された沖積平野での悲惨な水害の実態を見たくて、今後の治水のあり方について、堤防強化を中心に論じてみたい。そして最後に、現在私が住んでいる新潟において、どのような「都市の自然観」が構築できるのかを探ることとする。

……ただ私はいわゆる理系の土木技術者にすぎず、哲学者や科学史家、技術史家のような論理展開はできない。私が実際に川や水辺でかかわってきた事例を中心にしながら、どこに問題があったのかを述べていくしかない。こんな私からの提言が今の世の中を変える力にはなりようもないと思うが、ここに書くことが若い人にとってこれから生きていく希望のよすがになればと考えている。

## 【申込書】『洪水と水害をとらえなおす』・『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』

お名前	
担当者名（法人等の場合）	
申し込み冊数	『洪水と水害をとらえなおす』 冊
	『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』 冊
送付先（住所）	
電話番号／メールアドレス	

申し込み先＝農文協プロダクション（担当：田口） 〒107-0052 東京都港区赤坂7-5-17

Fax 03-3584-0485 Tel 03-3584-0416

Mail taguchi@sinseisaku.co.jp（文字はすべて半角にしてください）

メール利用の場合は、件名（『洪水と水害をとらえなおす』『河川工学者三代は川をどう見てきたのか』予約注文）と記入のうえ、

①お名前（法人の場合担当者名も）、②冊数、③電話番号、④メールアドレスをご記入のうえ、申し込みください。

※お申し込みは「新潟水辺の会」のホームページ（<https://niigata-mizubenokai.org/ookuma-books-preorder2020/>）からも可能です。